図書館て一体なんなの？
…もういっそ無い方がいいんじゃない？

法学部　須　藤　祐　孝

こんなタイトルを掲げたら、何を言ってるんだとハナから相手にされないかもしれません。でもこれは、本を書く者、作る者、売る者にとっては考えざるをえないことなのです。そして実は、これは今や図書館にとってこそ考えてみなければならなくなっていることなのです。

四年前、『だれが「本」を殺すのか』という本（佐野眞一、プレジデント社、2001年）が、新聞や雑誌の書評欄でかなり騒がれました。続編（『～　延長戦Part-2』、2002年）も出ました。この両方で図書館のことも大いに論じられています。主に自治体の図書館のことですけれども、その内容は大学の図書館にもあてはまります。図書館に関わっている人ならとうにお読みかとは思います。

この本のいいところは、著者・作者、編集者、出版社、取次、書店、図書館など本に関わる色々な人たちの常識を打ち破ろうとしている点です。それぞれの所で人々が何となく思い込んでいることが「本を殺し」ていると言おうとしている点です。図書館についての人々の――図書館の中にいる人、外にいて利用している人、していない人の――常識も無論その中に含まれています。

でもそのいいところが、いいところだとは十分認めますが、私には不満です。一つには今の常識を破ろうとしていながらそれに対置して考えられているのが、こうあるべきだという別の、おそらくは著者が本来のものと考えている別の常識なのではないかと感じられるからです。もう一つには、私には本殺しの一番の犯人である可能性が大きいと思える読者（＝大学で言えば学生と教職員）の検討があまりに少なすぎるからです。

二つ目については続編（『～　延長線～』）で、「一番責任が重いのは」、「本を殺しているのは読者だ」と言われてはいます。しかしすぐ、その読者を「作った」のは先に上げた本の関係者たちの「劣化した負の連鎖」だとされてしまっています。その通りだろうけれど、しかし、と思わずにはおれません。

そもそも、本を必要としない人が年々急速にふえているという情況が根本にあります。必要としても、その時の、瞬間のひまつぶし用ですぐ捨てるものだけ、実用ハウツーものだけという人、単位をとるに必要な教科書だけ、いや試験に持ち込み可の本だけ、それ以外は語学の教科書すら誰かのものをコピーしてすます学生、等々がふえる一方です。これではもう本に関わっている分野の人々の中に本殺しの犯人を捜し、怒っているだけではもうどうにもならないはずです。

本に関わっている人でも、自分が関わる分野のものしか必要ないという人がふえています。受験生時代は受験用の本、学生時代は単位習得用の本、研究者になったらその分野の本だけという大学教師が年々ふえています。つまり筆者・著者も、自分の狭い分野以外の本を必要としなくなっているのです。図書館関係の人も、仕事以外のところでハウツーもの以外の本をどれだけ必要としているでしょうか？

同時に、本を必要とする人の中で自治体や大学の図書館で借りてすませる人が多くなっています。利用希望の多い本を50冊も買う自治体の図書館もあるとか。宝くじにあたる法といった本まで備えて市民サービスに尽くす所もあるとか。それを先の本の著者は

大いに怒っています。本学の図書館も学外の人にまで貸し出すサービスぶりです。図書館関係の人には利用者が多くなって喜ばしいことなのでしょうか。（あるいは仕事が多くなるばかりで本当はいやなこと、当局ばかりがひとりよがりで喜んでいることなのでしょうか？）

ともあれ、こういう様々の深刻な情況が、着実に「本を殺し」続けているのです。

さて、本を必要としているわずかな人の中で図書館で無料で借りてすます人が多くなればなるほど、筆者・著者、出版社、書店にはマイナスになります。言うまでもなく、それだけ本が売れないからです。

しかし同時に他面で、固い本、難しい本、大部で高価な本などは図書館にでも買ってもらわなければなかなか個人には買ってもらえません。それを無料で見せたり、貸し出したりされると本はなお売れなくなるから困るけれど、しかしせめて図書館にでも買ってもらわなければごくわずかしか売れないし……でも図書館で無料利用に供されるとますます売れなくなってついには殺されるし……と実にあやうい状態におかれています。

今の公開無料図書館なんかいっそ無い方がいい。たとえば自治体、大学を問わず図書館はすべて館内利用1冊につき100円、貸し出し1冊1日300円といった有料制にしてその料金を著者、出版社に還元すべきだ。コピー全面禁止、コピー機全面徹去とすべきだ。本を書く人、作る人には目を向けず本を無料利用するズルイ人にばかり迎合している図書館は死すべし！……なんて言ったら、〈良識〉ある方々に笑われ軽蔑されることでしょう。

私も本の利用者としては、バカな、と一笑に附したくなります。でも旧来の、そして今のままの図書館でいたら、図書館は本を殺す犯人、重要犯人の一人であり続けます。そしてその結果、やがて自分もやせ細り衰弱していくでしょう。もう常識をこわすことが、常識を越えた発想と行動が必要になっています。

先の本の中で、著者のインタビューを受けた図書館流通センター（TRC）の社長が言っています。

「図書館人には、本をつくる側が、ああ、もうつくるのイヤになっちゃった、というときに、あなたたち生き残れるんですか、といいたい。版元、書店、取次が小さくなっていったときに、それでも図書館だけソヴィエトのようにいばっていられるのか、といいたいんです」。（345頁）――図書館問題の本質をついた鋭い問題提起の言葉です。

今の常識の中にある図書館の中の問題を一つだけ言うなら、選書、収書の在り方です。これをほとんどの図書館は一般常識と今の本流通の仕組み、体制とに頼りきっています。

有名で何となく権威があると世間で思われている出版社の刊行書は、一般書でも専門書でも多くの図書館が収蔵している、雑誌などはどこにでもある。しかし、無名の小出版社のものはどこの図書館にもないということが少なくない。世間の常識に乗った横並びの惰性的思考が、図書館関係者にも非常に強い。

具体的な面では、ほとんどの図書館がその選書、収書を取次が出す「新刊案内」的な目録に頼っていて、取次のルートに乗らない出版社の本には目もくれなくなっています。つまり今の流通体制に乗っかって事務的に仕事をこなしているだけで独自の目、独自の感性を持とうなどとはしない。その結果、本に寄生しながら本の流通を支配し本を腐らせている取次大手に日々、無意識に力を貸し、結果として本殺しに協力してしまっています。

以上、本を書くだけでなく、自分の書いた本を自分で編集し自分で出版し（無限社・岡崎）、取次に頼らず、書店にも原則として頼らず、自分で通信販売し、直接読者に届ける試みを続けている者の、図書館に対する正直な思いです。

（2005-10-23）